



around the world

スリランカ ラージャパクサー族支配の崩壊

アジア経済研究所
南アジア研究グループ長 荒井悦代

スリランカでは、今年初めより外貨不足に起因する燃料不足やガス不足によって長時間の停電、激しいインフレ

が国民生活を圧迫した。そして政府は、四月に事実上の債務不履行（デフォルト）を宣言した。

三月初めにささやかな形で始まった市民らによる反政府活動は、四月にロンボ中心部の緑地帯ゴルフフェイスグリーンにテントを張り連日行われた。デモ参加者が最も強く求めていたのはゴタバヤ・ラージャパクサ大統領の辞任であり、反政府活動の主たるスローガン「GoGotaGo」がそれを明らかに示している。

しかし、大統領は自らの地位を守ることに固執した。ゴタバヤ大統領は二〇一九年の政権発足以来、一族を政府の要職に就けていた。大統領は、少しずつ一族を辞任させることで、反政府デモ参加者の圧力を減らせると認識していた。まず弟のバジルや兄チャマルとその息子、そして五月には首相職にあり元大統領でもある兄のマヒンダ

さえも辞任させた。

マヒンダ首相の後任には与党の代表者を指名するのが一般的だろう。しかし、与党はすでに分裂していたうえに、マヒンダ支持者などから反発があり、適任者を見いだせなかった。野党第一党の統一人民戦線（SJB）のサジット・プレマダーサに打診したが、サジットは大統領が辞めるべきとして譲らなかった。そこで大統領は、統一国民党（UNP）のラニル・ウイクレマシンハを首相に任命した。ラニルは、過去に五回（実質的には三回）首相に就任した経験豊かな政治家であるが、現国会ではUNPはわずかに一議席しか持たない。しかもその議席は比例代表で獲得したもので、選挙区ではラニル自身も落選した。したがってラニルの首相任命は、国会の支持を得ない、かなり異例なものであった。ただ、全政党が参画する暫定政府の形成、経済問題へ

の取り組み、大統領の権限を弱め議会の権限を強化する憲法改正、新たな選挙の実施など、政治運営の指針は明確であった。

ラニルは首相のほか財務大臣も兼任し、経済再建に着手した。ゴタバヤ大統領は、国際通貨基金（IMF）との交渉や経済政策などをラニルに任せて、先述の目的達成のめどがついた時点で大統領を辞任すると目されていた。ところが六月上旬「負け犬として去る」ことはない、と残りの任期を全うする意思を表明した。政治的嗅覚やバランス感覚を欠く発言だった。

IMFとの交渉は進んでいたし、水力発電が利用可能になり、停電時間は以前より短くなったものの、燃料やガスの不足、インフレは相変わらずであったため、ゴタバヤの発言は反政府運動参加者らの本来の目的であった大統領辞任要求の勢いを再燃させた。

七月五日にラニル首相が国会で、債務不履行（デフォルト）ではなく破産（バンクランプシー）という言葉を用いて危機感をあおった。さらに六日、ゴタバヤ大統領がロシアのプーチン大統領に電話をして燃料の支援を求めた。

反政府勢力からは、七月九日にコロンボに集まれという呼びかけがなされた。警察は外出禁止令を発令し、反対運動の大規模化を阻止しようとしたが、これに対して裁判所は「国民の表現の自由を妨げるべきでない」として外出禁止令の短縮・解除を命令した。長距離バス運営協会は、燃料不足で営業できないと表明していたにもかかわらず、地方からデモ参加者をバスに乗せてコロンボに乗り付けた。直接参加していない人々や団体の支援も得て、九日のデモが実現した。

デモ参加者は、大統領公邸、大統領府を占拠した。これを受けて大統領

領、首相はその日のうちに辞意を表明した。ところが、大統領と首相は実際には辞任していなかった。ゴタバヤは一日に隣国モルディブに逃亡し、ラニル首相を大統領代行に任命した。怒った人々は、一日、首相府を占拠した。首相兼大統領代行は治安維持部隊に国会議事堂に迫る抗議者から国会を守るよう命令した。さらに外出禁止令と非常事態宣言を発令するなど、まるで内戦中のような警戒態勢に緊張が高まっている。

七月一日、ゴタバヤの正式な辞任が発表され、二〇日に国会議員による投票でラニル首相が新大統領に選出された。しかし今後のかじ取りは困難を極める。経済危機を緩和するには、国外からの資金提供が必要だが、そのためには政治的安定性が重要である。その実現にはまだ時間がかかりそうである。●